三養雜記

一

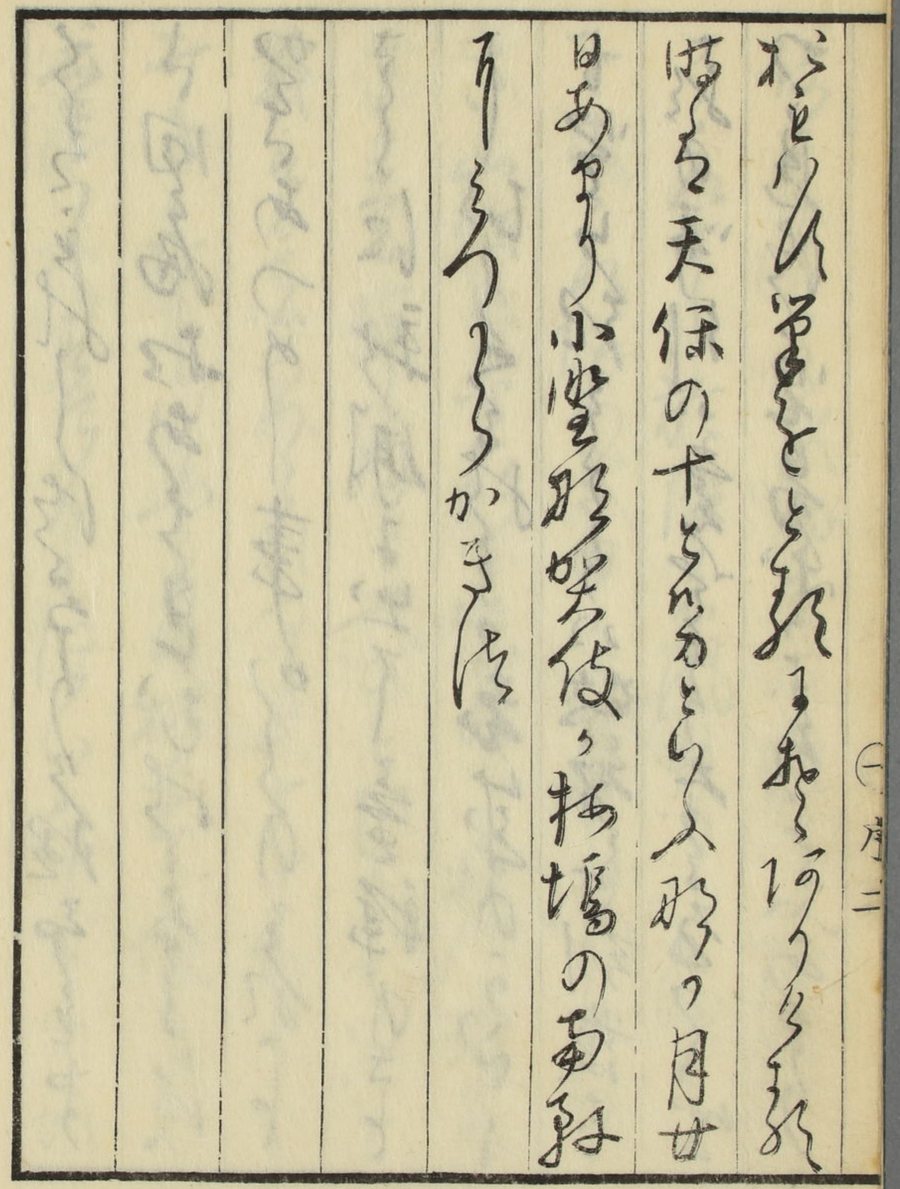
僧5
120
1

曽イ門
號 120
巻 1

山濤久化ハ美成そうと小峰とん
ふめる市と五宅はかりをかつ
をこ二家歌とさくとくをもさこい
ゆをこい葬句のお物より用和とるく
たとかれなうとをまとまきさまれ
ニとれうと市庫の文ようとく世語
ヲあいうりしうハ久歌をかりゆこい
ー述作ともやく冨とゆく武術宮

ゆまうとゝ人而立杖ゝ隙探と
ゝゝ於陵ゝ人ゝ川あのゝ海ゝ
をゝゝゝゝゝゝゝ年ゝとち
き山吹の金杯ゝ信濃ー杜門謝ゝ
とゝゝゝゝゝゝゝのとひきて海と
載ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝきゝゝゝゝゝゝの松ゝ堆きと
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝか

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ同ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝあつめ一事ゝゝゝゝゝゝゝこと
ゝゝに新風ゝ出て童稚のゝと
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
も学ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの呼引ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝ見ゝゝゝ児易ゝゝゝゝゝゝゝ



三養雑記巻一目録

元日よハゼをまく
萬歳
初午稲荷詣
六郷橋
観音籤
福主霊籤
書を手と云
魁星
かぞへ
屠蘇ヶ年より飲始
七種のなゝ詞
地口
英一蝶女達磨の畫
關帝籤
竹帙
上大人
字謎
あびす紙

實語教
新吉原燈籠
河東節
かげま
朱硯
地震ふる晴雨を知歌
正五九月
鯨帯
童子教
玉菊小傳
男色
香の圖
圓轉圖
雨は長短を考歌
狐狸の書畫

三養雜記卷一

神無月なり雨ふる夜半火鉢をとりて書よむ
アヽ木枯の窓うつ聲は淅瀝をうつ〳〵こゝかゝ行末
乃とゞもはひつゞけ〳〵、
よやあや定めなき世のなゝよぬる夜をゝつけ〳〵ふる
時雨ふるとゝろ詠をうつ〳〵わりふる境に臨〳〵物を觸まこと
に六塵の樂欲ハいでくめりたとひ揚州は鶴あるとも是ハうと
ましきも人心の常なれバ命をうけ〳〵願ふとも身は終るまで
心は任すもの有るべきや、窮達ハ命なり、數〳〵ぞ有
況、たゞ歡ぶべきはたゞずいでや世捨人をも異なるぬ、おのれな

ごり心ハ月華のながめもさかりハこころみどりに日を経ん
こそ願ハしけれ、今茲も暮ゆく空近くなりて、金杉の里に家
をうつし須東坡が詞の三養をまなびて足りて事たれる
身をやめの住かなきハ書ども八大かた人の家にあづけられど、
今ハ一巻たに傍になく、机の塵を拂ひて日をかさねに年
もあけて 天保九年戊戌 元日にも霞のたち引わしきも春めきて、日
かげのどやかに、田井のあたりのけしきハ市にかはりて華鳥の色音を
るりきれ、何のまうけもなけれど、心ばかりハいとやすきこゝち
ぞせらるゝ長き日のつれづれなぐさめんとて、暗記にまかせて
日ごとにおもひ出るまゝにかきつくるぞせめての心やりなる、

元日にハゼをまく

近きころまで元日の朝まださきにハゼをまくものありて、ハゼ
賣といふものあまねく来りしが、いつしか武家にのこりて風遺
なく、町にハ賣來もなかりし、一通りのみ伊豆の三島明神の池
の鮒をも明神のつかひ物なりとて、毎年元日池の
鮒にハゼをまきてあたふる神事あり、元日にハゼをまくこと、ハ
この神事起源なるべしと伊勢安齋の説なり、又ある人の説に、
むかしハハゼにする料の餅米をもとめて家々に煎り試むるに、よ
くハゼる年ハ吉ハゼのあしき年をば凶なるとし占ひてありしが
後にハ只ハゼを買てまくことを吉兆とするのみになりしとぞ

又、按ニ戒菴漫筆に、東入呉門十萬家家爆穀ト年華ト云ふハ爆竹婁の詩なり、これを併せ世ハ、和漢一般の風習なり、ある人ハ説をよくとす爆竹ハ何事も年月を追ひて、便利よけれ共、多くハ、春のまつりの注連縄も、家毎に藁を以て造るを、後ハ年の市あゆきて買調ふもまでかくおぼえたり、今ハ町々の辻ふてもはひあるきても賣るとふれ、居ながらのもとむることになり、年の市もむかしハ雑器市と、浅草寺ばかり外ハ、今ハ所々の神社ハ多くいでき、

屠蘇少年より飲始

屠蘇ハ、ぎりて年少のものより飲始むるよし、荊楚歳時記ハ、進屠蘇酒飲酒次第、従小起、註に後漢書董勛ガ言を引て、俗有歳首用椒酒飲酒先小者、以小者得歳先酒賀之、老者失歳故後與酒、と、又ハ、吾邦の古も亦ありて、内裏式ハ元日就内侍取机盛屠蘇、云、尚藥供御先賜少年、とあり、又屠蘇攷云、盧抑南小簡ハ、屠蘇甲幼より始むるとて、不遜なり、元日ハ一歳の始、長幼の分を正し、長者より始むべしと、云ふ理さもあるべきとよ、聞ゆもど、考の足らざるハ似たり、其よりハ屠蘇を、邪氣を辟る藥方なり、甲幼より始むるハ、全く藥を用ゆる法を借たると

と思ふ、禮記に、君の藥を飲まば臣先嘗む、親の藥を飲まば子先嘗むとあり、說苑に、殷の湯王の言を載せて、藥食は車に嘗て貴き至るといふ、たゞ考るに、家内の人さぐり暑蘊を飲むまうあるも藥の名あれば、先こゝろむるものは誰をか先に誰をか後まん、故に卑幼をもじめとする事至極のことなり、是全く聖人藥を用ゆる禮教をも用ゆるとも知るべし、とゝるも確論とゝるべし、

萬歳

萬歳は男踏歌の餘風なり、花鳥餘情に、正月十六日の節會を女踏歌といふ、舞妓すゝゝ、男踏歌を十四日あり、

殿上地下の四位以下は華やかにきらびやかとあげうして、おもをゝゝ舞をづゝゝ、これは正月十四五日より京中の遊士月に乘じてあるきこなゝへ、ゆるやかに舞しよ、事おこなひ、末の代に千秋萬歳といひ、逸興をのあるをあふ、これらは餘風なりとゝえたり、源語秘訣世諺問答の說をあまた異なることなり、さて今來る萬歳を江戸にては參河萬歳と地びたれと、遠江相模よりも來るなり、關西へは、尾張大和より來るなり、張州府志に、無住國師所作樂稱萬歳樂、使小奴德若謳之以爲賀正、至今春初稱萬歳者師之遺愛也とあり、無住國師道跡考に

も同じあり尾張萬歳の唱歌ハ無住國師の作れよ
しあて今傳ふるの五章あり、

七種のうた詞

正月七日ハ七種の若菜をそなふるハ都鄙ともする事
あり、六日の夜七くさをたゝくなやし詞ハ七くさ打なく
どれそとみるんのとゝとゝぬさきをといふをハ何乃
ゝけそもあゝ打まゝ家とも唱ふるとなり、桐
火桶とゝ冊子ハ正月七日七草をたゝくハ七づゝ七度なやう
なれバ四十九たゝくやと有職ハ人やゝとゝ斗あり、これも意
て問ハ九星ハそれまゝのことハとて笑つゝ語りたまふ事ハ

七くさハ七星なり、四十九たゝくハ七曜九曜廿八宿五星
合せて四十九ハ星をまつるなり、唐土の鳥と日本の鳥
ともとゝ先ハ七くさ薬手につゝ入て元鬼斗張げ
ゝ打ふるまて物ハ大事ハ侍ふるとい
あつぐれとゝ伝ふ事ハ元鬼斗張ハ
廿八宿の中ハ四宿まていづれも吉方の星宿なり、宿曜経ハ
さて唐土ハ鳥とつゝハ證とするなどのりれハあるなど七草
冊子とゝハものハ須彌ハ南ふとゝ鳥といふ鳥あり、かの
鳥ハ長生をすると八千年なり、此鳥春のとゝめ毎ハ七
色の草をあつめてゝくすゝ忘に長生ハ我すなりとゝ

が鳥は命を、汝が親の命に轉じるゝといへり、七色の草
を集て柳の木乃ぞんに載る、玉椿の枝まで正月六日は
酉の時よりはじめて此草をうつべしといへり

初午稲荷詣　地口

二月初午の日稲荷詣することは、貫之集に延喜六年月並の
屏風は歌乃中に、二月初午稲荷詣したる所、
獨のみ我こえなくにいなり山春の霞の立かくすらん
また源順集に、二月初午稲荷の社にまうづる人に、
いなり山尾のへにたてるすゝしに行かふ人のたえぬなりけり
など、あり、かゝれば世よりはやくもてはやされて、猶諸書に見え
たるところ、初午の日を用ゆるよしなど、すべて賀正よりの追儺
まで時令のことを予ろゝて歳時要略にくはしく記したれ
ば、こゝにはもらしつ、さて江戸にて稲荷祭には地口行燈をつ
らぬる事すなはちなり、これ地口といふは、土地の口あひといい
ふをまて、たとへば地張きせるを、地本絵冊子地酒などの類
いつまでもこの地といへるは、江戸をさしていふ詞なり、さてそれ
行燈にかくるを、絵地口とて、絵を専にしてまうづる人のめを
なぐさまむことをむねとするなり、豊芥蔵寿は小冊子
地口須天寶鸚鵡盃比言指南地口春袋などいふ、安永ごろ
は印本なり、その頃もやはらしと見えたり、この地口はくはしく

のうちあり、天神は手まて口をあきハたる繪ハだまりの天
神、鉢巻天神團子を三串ゆるふ團子十五、三五十五ゐり、むりハ大くらい
出来てあり、多くハ、ぐつふせそのゆるゝ丸さ或ハ切りひゆるゝ、まさ
繪を半ゆるせたるハ、

達磨大師の茶せんのすゝ

ゐびたを

又句を長くゐつげたるハ、精靈のまこりと棚經の坊主
丸ハ丸ハこそそぎ露がたる、女郎のまつとゝ卵の四角君が射すゝさ
的場で丸ハ丸ハ尺二を射んかさる、君が寝姿窓ゆゝ丸ハ
ハ牡丹芍藥百合華

まさ有りとゝ付まゝ〳〵ふハ句の下ハ詞を次の句乃上ゝ
ハさて、長くゆるさるゆり、上畧六じゝやの口をのゝ丸さる、ゝるハ道
づれ世ハかるゝ、おきけハ四郎高綱で、つるでゝく繩十文字、十
文字ハ情ゝ丸ゝ丸ゝ百まゝ〳〵ゝ丸ゝや九十九まで、
九まで有たる中じやりの、じやりの葵ハ二葉山、下畧ゆゝ
ゐり、丸唐山ゝいふ粘頭續尾の戯とゐる〜趣なり、こ丸〳〵そ
の類をゝるゝハ自體裁ありとゝいふ〜〜〜ずゝく地口ハ詞の縁
ハちゐれぬを巧ゝ〳〵、初の文字ハ同字ゐゝねをすゝとすと
ゝ、ゝねて聞たる中ゝゆゝ巧ゝ堺ゆる一二をいとて、

繪馬あけぐゝんぐき　胡麻あげ鳶ちどき

梅ハ見てさへ人醋とやヤス　夢ヨ見てさへ人よいとやヤス

雪見ふ出たり三谷舟　一富士二鷹三茄子

年の内いろ乃ヨ白髪ゞ見えるる　沖の小〻い小白帆ゞ見えるる

玄関ヨ席をあ〻なめて口上をきく　林間煖酒焼紅葉

銅ハ鐔　渡部の綱

撿校けんを杖ゞたくさん　天上天下唯我獨尊

娘ハ琴より三味の二ツ　鼓ハもとより波の音

これらの類猶のまくあるべし、地ヨと似て異なる、語路とあり、語路ヨいふを自然と語勢の通ひてそれとこゝに一致なり、

九月朔日命ハをし〻、鰒ハ食ふ〻命を惜し〻　おそあ久松ひろいよてせまい　陳州

廣松ひろい

この類ヨ語路といひて、むかしより、語路の宗匠ハ萬句合ハ會あり、語路まん卵といふゞ秀逸なり

ときゝ、もぢりといふハ中の詞を上下へこそ聞するい

ひゝ、御祖師ヨ有難ハ有ぶたゝ〻ハ皮、あぶり餅

焦堅子　釈迦摩耶夫人ゞ

あくまの化寝間へいろ〻ひ〻ハ一體ヨ、

あぶらいもあるて人

朝顔の華

六郷橋

六郷橋を掛ハ家康ヨ定かふりのに見えねど、小田原記の永禄九年武田信玄小田原ヨ人數ヨ隙をう

ゆゑに、世ひよりさる方より小田原へ押寄るといふ條は、搦を焼落して甲州勢と通さば、信玄品川の宇多河石見守鈴木等を追散して、六郷は搦落候へ、池上へうつるとあり、この時搦を焼落すことのあれば、北條家は盛りあり頃掛そめしやそれ後長く舟つゝみあるべし、六郷新搦とて、慶長五年より近ごろは搦ゆゑ有りその事なり、快運上人の六郷搦修繕記といふものよりえたり、さてその後搦のことは羅山の丙辰紀行鷲峯は癸未紀行よりあり、寛文延寶の道中記は類よりこゝかこの搦あり、自事の洪水ゆ流亡せしゆそれ後假搦よて来たるゝ、あるゝ後方ゝ舟渡しとあるぬとぞ、

英一蝶女達磨の畫

畫工の英一蝶も世に名高き人なり、その事跡は書に記したるも人口に傳へるも、多くは傳會の説なり、羅をうつりしことの由は龍溪小説附録にあるところ實に近しとて世にあまねく畫がきつる女達磨といふは、一蝶がめきたる名ゝとぞ、そのゝ新吉原中近江屋の抱に半太夫といふ遊女あり、後に大傳馬町の商人へ縁つきて、その家に人となりて何れとなくのゝ序に、達磨の九年面壁のことをとゝるゝ半太夫きゝて九年面壁の

坐禪も何やどのことゝあるべきかも女の身のうへこそ紋日
もの日の心づかひに晝夜のわかちなく面壁にむかふとおなじ、
達磨ハ九年これハ苦界十年なれバ、達磨よりも悟道まさ
れりて笑ひけるとぞ、このまへ一蝶がきて、やがて半
身の達磨を傾城の顔に繪きたるが世上にはやりて扇うち
は多葉粉入柱かけなどにかきて、女達磨といひけるとや、市
川栢筵がその畫の讃に、そもさんか是こそさんハ誰と詞書
して、九年母も粋よりぞしぶきかれ、といふ句をしけ
るとぞ、俳人素外が手引草に九年何苦界十年まずごろもと
いふ祇空が句あり因にしるす、

觀音籤　關帝籤　福主靈籤

唐山にハ觀音堂にもあれ關帝廟にもあれ、その餘の神佛
にいづれも籤ありて各異なり、吾邦にハいにしへ慈覺大師
の觀音籤を將來ありしよりこのかた、いづれの神佛も
堂社にもただ觀音籤をのみ用ゆることゝなれり、唐山に
ハ關帝廟にて盛なるよし、五雜組に、天下神祠、香火之
盛莫過於關壯繆、而威靈感應載諸傳記及耳目所
見聞者皆灼有的據非幻也とあり、その廟に籤あり、
關帝靈籤といふ、吾邦にても信ずる人まゝあり、ちかく新室
手簡に關帝籤を占ふことを見えたれバ、白石先生も信用し

たまをとゆ、さてこの頃ある唐本の中より一ひらの籤文
ぞうとて、青雲堂れあらぐ贈られたり、福主とあるハ福の神
おどう、ゑづゝけまぞこてゝ載す、

福主霊籤

第八十五竿　大吉　助泄葉坤維助
占得清香四壁盈　緑楊枝上有黄鶯
紅鸞一幅連宵至　且去開門到處迎
解　意外之喜　從天而來
曰　孕男各就　寔曰快哉

竹帙

源氏物語より御経より玉の軸られ表紙ぢすのゝ
ざうのとあるぢゝハ帙簀と書て、細流抄ふ竹の簀子よあゝ
たゝふまき経をつゝむものゝとゝ、あれ帙簀れ古
物今もたゝ世ふ遺り存するものゝあり、擁檀王院ふ藏
するとれ己ふ古圖類後ふ載たり　全形を伺ふ足れり、
今舶來れ唐本ハすゞゝ木綿帙のゝ多ゝ絹ゝて造
るもゝ多ゝ、彼邦ふも古代ゝ竹帙を専用たりと見え
て、天禄識餘ふ、古人書巻外必有帙藏之如今裏祇
之類白樂天嘗以文集留廬山草堂屢亡逸宋真宗
命崇文院寫校色以斑竹帙近頃子京家王右丞書

一巻外以斑竹帙表之云是宋物如細簾其内襲以
薄繒觀帙用巾旁可想也今大内蔵黄庭内經墨蹟
亦有蝦鬚草細簾裏之亦是宣和物也とあるをありへば
吾邦の古物を以て隋唐書帙は製せりひやるべし、

書を手跡と云　上大人

能書を手ろきといへハ書を手といへるなり漢書郊祀志に
師古ゞ註ふ手謂所書手跡とありされバ今書を學を
手習といふを俗語よりゝ王充論衡ゟ文吏幼則筆
墨手習といふことを以てそ吾邦ふく小兒書を習の
ことゝよいろはを習ごとく唐土ゟて八上大人丘乙己、

化三千、七十士、尓小生八九子、佳作仁、可知礼也云
廿五字をかゝるゝ故ゟ、猥談ふ多ゝ、

魁星

新刻ハ書籍ゟ鬼形を印すふ魁星といふ星は圖ゟ、
唐土すいづゝのころより初りといふとハ詳ならず學
問の試ある時ゟ衆人に魁して科第を取んとは吉兆
ゟ、魁星は圖を名づけられ、その圖ハ即魁字は謎ゟ、按
ずるに倘湖樵書ゟ世人奉魁星踢斗圖以為宜科名夫
魁字乃鬼抱斗鬼之脚右轉如踢北斗然所謂魁星
踢斗者不過藏一魁字以為得魁之兆耳とあり、又

この鬼形は、左は筆を把り、右は分銅を持の圖あり、これも由あることなり、堯山堂外紀は、天順癸未、崑山陸文量會試、寓京邸、戲為魁星圖左手握筆一枝右手握鏹一鋌取必定入手と題し、又云天門之下有鬼踢斗癸未之魁必定入手と題し、故をもて、今も吾邦にあまねく專書籍は古の圖を印するなり、ぞ世のはじめ、さて友人慧充といふ法師は、紺紙に金泥にて名づくる唐畫の魁星は圖をもてり、その圖堯山堂外紀はいふところあるをもて今左に載す、

字謎

大覺禪師卽心是佛頌ニ云有節不干竹三星繞月宮一人居日下弗與衆人同節の竹冠を除けバ則卽の字か、星れ如く一點して下ハ半月を抜けば心といふ字なり、日下と書く下に一の人といふ字を抜けバ是の字ハ、弗と人と同すれバ佛れ字なり、これ字謎の詩なり、四箇口盡皆方十字在中央不得作田字道不得作器字、これハ詩にあらで字謎なり、解て圖字ハ謎とも、予かねて和漢の字謎離合詩隱語の類を集め三卷とし精彙と名づく

華ぞ咲よりいづれを梅とも

きてをくまゝとゝふハ梅字を

詠かり吹ゝに秋れ草木の花をゝまゝバ山風を嵐といふらんといふも、嵐字をゝちよゝある歟、近来の唄浄瑠璃の文句あゝ、百日曽我近松門左ハ言ゝ

ゆゝ糸れとくよとゝれぬ下心といふ、戀といふ字の謎なり、江戸節夜の編笠ハ、山ゝも松れこゝれ髪とゝも、松ハゝだれゝゝ訓あゝゝ形、今の童謡ハ松といふ字ハ木邊ハ公よきゝまゝあれゝきゝれゝとゝふまゝゝ、雅俗の分ハ自殊なりとゝゝゝども、ゆゝむきハ絶て相似ゝゝ

ゝゝ

かぞ〳〵といふ戯はみるきをみく、拾遺和歌集よりかぞ
物語〳〵ならをとろふてと端書あり、好忠の所ふ、
つらをとはえもいはれぬ松千とせをやもたれ
ぬべきと人々えさう、加の徒然草に資季大納言入道
やきをえたる人具氏寧相中将よ逢て、とゐ〳〵の問を
んそとの事、かゝどゝ知りとる者へやさぐらんやといはれて
ちぐ〳〵きをとはかをそ〳〵もまねび侍ねバ尋ヤまでもか
ゝ、何となきそぐろごとをあそ問ゝめとヤさまして、具
氏をさゐ知より聞かひ侍れどそれをろ者ぬと侍り、
馬のきろつをやうきろよのをどろかゝぐれ入ぬれんだらゝや

ヤとハいふかゝ意ふう侍らんと申さまをふ、大納
言入道をとつまりてまゆふありて所課いふ先〳〵せ
られたりとぞといつるを、徒然草よ註釋ハ書も多れ
ど、これ馬のまろのかぞ〳〵と解たるもれあ〳〵、南畝翁乃
筆記ふ、真字徒然草よ、馬之吉了狐之尾之中四入衢
連動とろきて、吉了を秦吉了といふふいぐあ〳〵ハ、南
郭の大東世語よ、馬吃糧狐丘四入九連等とうき、保
己一撿技ハ、馬吉駿狐丘四入九連倒あり、山海經よ大封
國ふ文馬あり、縞身朱鬣、名づけて吉駿といふ駿馬も、
狐の丘よつまづきてぐまんだらと倒るをあると云ふ

先ありとかやとあり、これらみな謎の字面ハさもあるべきものゝ、
その意までに解に及ばず、閑田耕筆に解たるを併て
明解といふべし、柏原瓦全が記せるものにみえたるよし、
馬にまたがりやうにまたがりものを中におさへつゝだれんだり
といふをのこときがたきに、ある大納言どのもまけ給
ひて肩をさげいろあしうせられしといふを見ゆるが心にうかゞ
ひてかゞへ見るに、馬にまたがるハ馬といふ言葉のかなり、中やう
きやうにまたがる也中に入るとハ「―」と上にしたる二文字
をのこして、中の七文字をのぞき中にいれりとハいひまぎ
らしたるなり、だれんだりとハ顛倒にて、のこる「――」の二文
字をさかしまによまば雁になるなぞとハいひけたり、さしもなき
くせごとにめでて興ぜしむる風流なるべしとぞ、ありかくいへバ、いと
むづかしく聞ゆれども、今童児の常にたはぶれにいふなぞくに
これと全おなじきの似たるハ、則ちときみて狐こんと啼それハ
空言よこそのなきこゑづくがもんどりをうつ、これ馬のきると
同例にて、空言よみてこれまでをそぶくれりハこゝの鳴こゑ
づくハこゑがなければ、づくの二文字だけ存するを、もんどりをうつ
つといふにて倒置すれバ、くづといふ謎になれるなり、
後奈良院御撰何曽といふ書あり、群書類従にも収たり、
それらこれなぞハ今やうとハまらく異あり、予ろうくきまれ

るふこぞさひつくりて七月半を、なとぞん、雀が利を持
あぐ〳〵目とあれさまでも子をバ羽れ下まありを硯ぞこ〳〵
中てんだう〳〵て月かり〳〵すまぐを、蔦葛、あさうてハのこご
糸りをたまごと解ける類たくこの世むきかり、今児戯まい
つぶ中みも巧拙あり、破き障子そうけて、冬の鶯とろ〳〵心ハ
たくをまつこそれ三味線とやけて、男れ氣性とろく、心ハひく
まひられぬ、ぞ、ぞうのとあまくなのれど、鄙俚あるりのこいと
多〳〵

名びす紙

紙の隅れ裁切のこ〳〵たを俗ま名びす紙とこ〳〵そハ十

月まハいづくれ神くも、こか出雲國へ行たまふよ〳〵世ふいひ
つこ〳〵、この月を神無月とこひ出雲國ふてハ神在月とい
つふどこ〳〵ぞもいふまは、恵比須講ハこの月まするなをハ
名びす神ぞこ〳〵ハ出雲まへ行たまはねバ、神紙立裁たりのこ〳〵と
いふこ〳〵ろみて、名びす紙とそいこ〳〵ぬこれ〳〵も謎語を
の類まて、饅頭をこ〳〵ぞまたれ馬の看板をぐ〳〵地くハ、
あ〳〵ぞまと〳〵ふ意湯屋美馬の入口まを矢を出地くハ、西れ弓射とこ〳〵ふ湯入
こ〳〵ろかこと〳〵ぞ、今も焼芋こ〳〵家の行燈まハ里半とこ〳〵る
ハ、その味をひのこ〳〵まちこ〳〵栗九里近といふこと、十三里とこ〳〵ハ栗九里ふまよ
里ぞ〳〵とこ〳〵ふと誰も名れ〳〵とふこと、

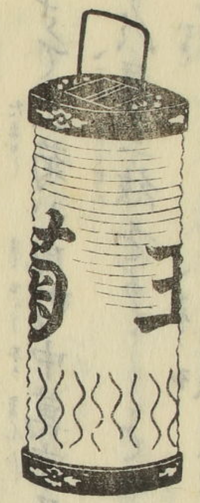
實語教　童子教

實語教童子教の二書ハ民間ニ多く小兒のそれ讀そゞめよりの習俗あり、實語教ハ弘法大師の作と世ニいひ傳へれど、託名れ書ニて、辨ずるまゝくも明き不文ニもれなれど、まゝ後世のあれよりあゝ、康頼が寶物集ニ、玉ハ寶ニまどもす名の世れ凡夫ハ玉を寶とも云ふべくゝず、ことふゝぐくやうをも云らゞ、弘法大師ハ玉こゞされバ光ニし、ひゝりあさを石瓦とすとそ仰られゝあり、無住の雜談集ニ、ある人實語教を誦しゝゝあどもゝ、童子教ハ東大寺の安然和尚の作あり、三國傳記ニ安然和尚の獨責れ子ニ小文を作り童子教と名つけ教たまふとあり、出法師落書とふ永享のころれ弓の書ニ、童子教朗詠あどをゝ〳〵ゝとふとも又ゝ〳〵ゝ

新吉原燈籠　玉菊小傳

新吉原ニて七月燈籠をゝ〳〵ゝとハ、玉菊とふ遊女の追善れ起りて、今猶年を切ひて善美ニ盡し盛あり、さて玉菊ハ角町中萬字屋の抱ニて、こゝろざそいやしゝゝゝ、琴三絃をよくしゝとも河東節の淨瑠璃を好て つねニ彈ゝゝと、享保十一年三月廿九日二十五歳ニて身まゝしゝ、その三周忌れ追善とて仲の町ニ茶屋の軒ど

ま箱挑灯をぶらさげ、



この挑灯は圖青摸雜話まえたり

それ翌年よりきりこ燈籠、あさ八まりり燈籠をぶらさげ、
そのつゝね年を追て潤色し今八華麗をきわめるとぞ、
是ゟ前、さゝバきりこ小ぶき玉ぎくゞ来るゟ前とゝふ句
人口ゟ膾炙せゝこの句八明和のころ東條萬五ゞ聞句ゟて
俳諧觸ゟ出さゝ八

その頃十寸見蘭洲通稱八つゝ蔦屋庄次郎とゝふ茶屋
のあゝゞ、俳諧師岩本乾什ゟあつゝて、水調子とゝふ河

東節の淨瑠璃をつくせ、文句ハ蘭洲自書表紙の繪ハ
中村方長七三郎筆なり、竹婦人作とある竹婦人ハ乾什の
號なり、まゝ袖草紙とゝふ冊子をも印板ゆくちなくの人
人まあれど、今もたまゝ藏する人あり、この蘭洲ハ細井廣
澤ゟ書を學びしとゝい、

河東節

河東節とゝふ淨瑠璃ハ、江戸半太夫弟子の河東とゝふ人の、
享保中より一流をかゝうゝて遂ゟ一派の祖となり、此
河東とゝふハ、ゝと品川町なる天滿屋市十郎が子まゝ加
藤藤十郎とゝひ、河東ハその俳名なり、紋ハ九の内ゟ三ツ引

男色ハ、ゝと天理ゟそむくゝ邪淫ゟくゝ在家出家の分ゝく
ゝゝ分いまゝ、ゝ佛説ゟ男色を誡むることすでゝ法華
經正法念經十不善業道經五戒相經造像功德經、
沙彌十戒儀則經僧護經阿含暮抄四分律五分律、
僧祇律、有部律、十誦律なゝど、猶五百問論、瑜伽論ゟと
見えれど、今ハ大ゝそのゝあぐゝかれハ天竺ハ佛在世のゝる
ゝ先より男色の盛なりゝをありひやるゝ、さて唐土ゟ
も比頑童の訓尚書ゟ見えてよりゝあのゝそれ寵さる
んなりゝゝより陵餘叢考まつまびゝるまゝ、吾邦のとも
いゝつゝゝとゝふ書ゟ昔ゟのゝをたゝゝ輯めゝるゝゝ

今の男色は童はもと俳優とあるごく近きころまでもこの
風あるゝゆゑをかげまとよぶこといふる也名もかりひろ
ずあるゝふある時友人芸庭より語は次いひ出れバうねて
嬉遊笑覧の中ふ右ゝ引るとて抄書して出られそう、
うげまハ京師宮川町大坂ハ道頓堀をゞ猶ありや右ゝ、
人倫訓蒙圖彙ふ、狂言役者男子を遊女屋は女をかゝ
るゝゝふ抱へ出さて藝を右いれるれり、十四五歳まるれバ
そは〳〵ふ色づるゝ其居へ出〳〵藝よく名をとれバ我門
口ふ大筆ふ誰ゝゆゝゝ名字を右ゝ、夜ハ戸口ふうけ行
燈ふ名を書付出ゝれり、いまゞ舞臺へ出ぬハうげまとい

ふ、他國ふ出ゝるゝを飛子とゝゝて足元ゝ、心化粧といふ
冊子ふも今時男子を野郎の新部子まゝうとゝゝ、新部
子とハ歌舞妓事始ふ幼ふあく藝の至らざるをいふとぞ、
ことハ薩州の方言ふて〻ふ知音をもとめて義兄弟と
あるゝ〻り、其角ゞ風流つゞく草ふ野郎うげまいづる
大なるゝ、ぬれハ曽我ふ栗あゞご武道ハ志田良あゝ
右ゝゝゝまゝだ川、又女郎の名をゞ付たるをあづゝしく
あゝゞゝゝゞのゝく興ずるれあり、西鶴置土産ふ花
山藤ゝ助松風琴之亟雪山松之助あゞゝなうげまの名
外ゝ、一代男ふやらゝゝりてあそびハ散るる花のゝとふ狼

のねてみるゞ如く、頂城よりむかへ入りる月の前より提灯
のあき心ぞうとあんとあり、あまりてありへばうげまハ
狂言役者のいまゞ舞臺へいでずうげよりくちとくこと
ろかゞ、吉原ハ遊女の引こゝをゞいつよりまゝこゝろゞ
えるりと考ゞ、

香の圖

香の圖とつふりのそれ道ふたづきいつあるゞいハの故ゝ
ゝ圖ありとこゝきまへ考ゝ人もかゝゞ、これいりと香をきく
ときの圖ゝ、まゞ常より目あれゝる源氏香のことをいたゞ、香
をきくよ東初よりその圖あるふりゞ、五炷ハ香を試あゞ

えたゝ次第をゝきゝあるまゝ自然とそれ圖いでゝ多ゝ圖
の作りやうハ大概左のごとし、源氏香ハ香五炷ゝ五炷の内
一ハ香五色、二の香五色、三の香五色、四の香五色、五の香五
色、あハせて二十五色をおもゝへていづれゝ多ゝそれ門五
色ゝ出ゝ、香本より一色づゝたき出す、假令バ一二三四五
ゝかハりたる香ときけバ ▥ 如此圖を名乗紙ゝ書、一四
ゝハり二三五同香ハ ▥ 如此書、一三同香ゝ二四五ゝハたゝ
ゝときけバ ▥ 如此書、一三同香二四同香五ゝハりたゝるとき
けバ ▥ 如此書、一三同香ゝ二四五同香ときけバ ▥ 如此
書ゝ、餘ハ二色よりあゞらゝ考ゝ、ゝれ如くきゝ

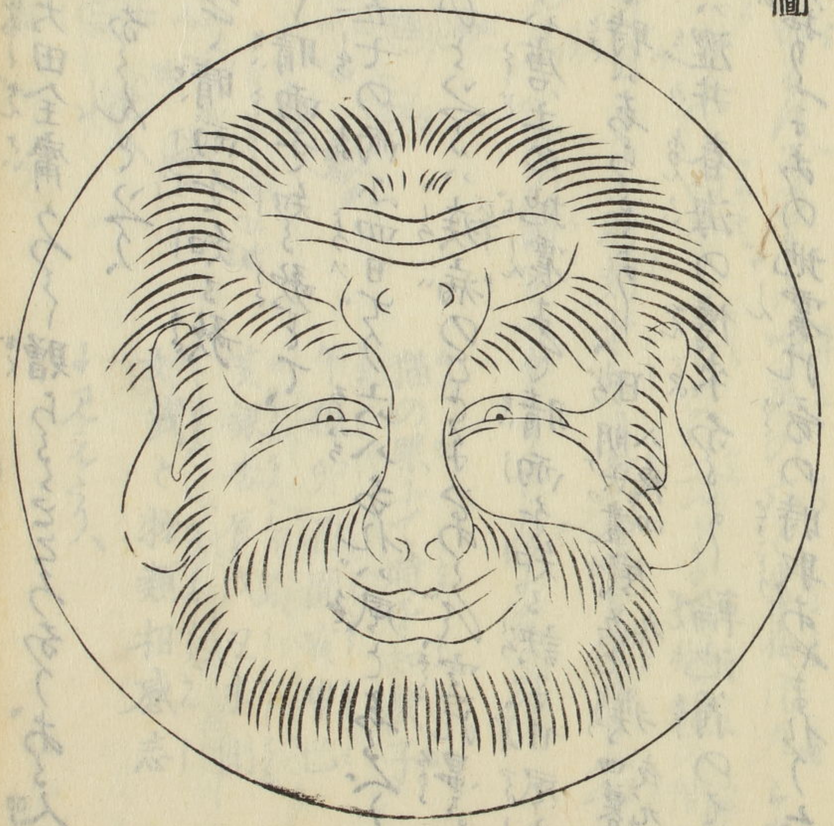
るゝよ圖をつくれバ自然と五十二の圖いでゝ

朱硯

白石先生の佐久間洞岩より贈られし手簡に朱硯は白き、石にあくいろくとあり、これによりて予年ごろ白石の硯を得て朱硯にせまゝ〳〵ぶあり時東文齋の肥後の白島石の小硯を携へ來たれり、よりて購ひ得てこれを試に實に朱色を發すること常の硯にまさり、一日考槃餘事を閲するに朱研亦得舊石者方妙或用白端亦可といへるハ唐土の人もやく已に朱研に白端を用ゆる

圓轉圖

開口如咲
世上看冷
煖
閉口似怒
人面逐高
低

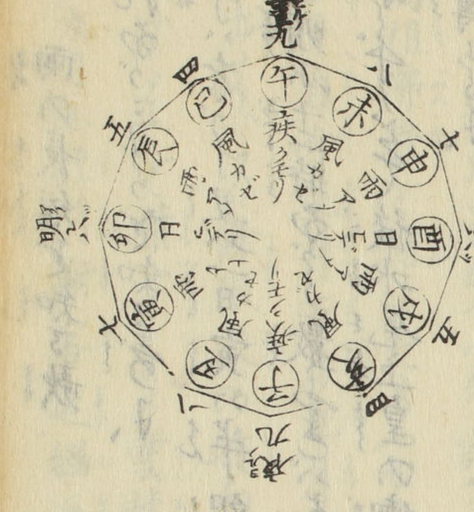


右圓轉圖ハ大田全齋ゟ贈らるゝところあり、ある人ハ
古鏡の背文かゝんとゝ、

地震ふて晴雨を知る歌

世ゝ地震ふゝ晴雨を知る歌とて、
九ハやまひ五七の雨ふ四日てゝ六八あれバ風と考べし
空に暈を
ゝの九ハやまひとゝるハ疾病のことゝあゝ、
ゝゝ、そのゝゝハ唐土の地震まて晴雨を知る訣ゝ日風疾
雨と順ゝゝる時ハあらゝゝよゝ、日明六晝八夜四風五七九疾四暮六夜九
雨明九夜五、孔ハ澀井春海の傳来ゝるゝ輪池翁のゝ
ゝ孔ゝき、再ゝゝまあの地震孔ゝの時取あやまれゝ、ゝ

日てゝかゝぐゝハ叶ゝ、そのゝゝハ明暮の六と晝夜九九と
竪横ふて數一かゝゝ四ハと五七とゝ二ゝて竪横の間を
ゝゝれゝ、猫ゝ目ゝゝ時刻を知る歌ふて、
今目やすゝん為ふその圖をつくりて左よゝ、



猫の眼ふて時を知歌子
午線卯酉圓寅申巳
亥銀杏辰戌刃未側
文銭と、物類相感志
ゝ見えゝ、

雨の長短を知る歌

雨はあがこゝろを知るべし、

子ハながし丑ハ一日寅ハ半卯ハ一時とうみくゝ

あの順ハ十二時なゝ數まもバあるべし、花ぶの上ばゝ

しゆずとて後水尾上皇の御製ハよく直まもたまひと

ひ傳なる、

暈うかゞ雨とさゞめよりちゞちゝくとくと天氣なり

暈ゝなゝバ長雨をふ（子辰申）すハ日を經ざる雨なり ちゝゝ、半日（丑巳酉）

寅午戌 天氣、天氣なるべしと云るあり、あゝハ云風を占まも

ゝくあれりとなり、

正五九月

正五九月ハ三齋月三長月まゝハ一切諸佛神通月三神變

月などいひて、專佛事をなすべき月なり、優婆塞戒經一

字頂輪王經より出るゝ、法苑珠林ハ提渭經を引て具子

明セり、釋氏要覽ハ智論を引けども論中より文なし、唐の

高祖佛教を信じたまふ故なり、武德二年正月甲子ハ

詔より自今正月五月九月不行死刑禁屠殺と唐書

より出るゝ、この餘風宋の時なを遺りて、正五九月ハ葷を

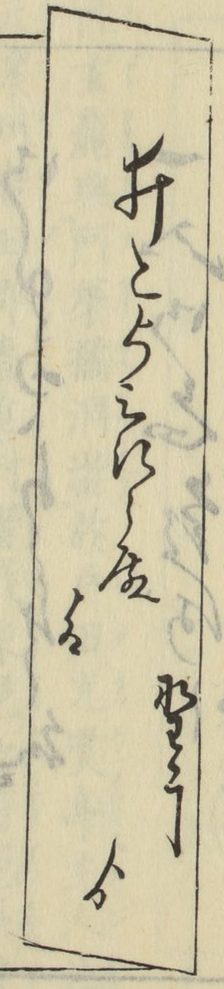
食することを禁ずるより雲麓漫抄より見えたり、又正月五

月九月ハ杜門謝客延緇流作佛事ハ唐ハ遺制なり

とも老學菴筆記ものこり、吾邦ハとさゝゐ隨唐の制度を
そのまゝに受たるのこるゝ、佛法の行ハるゝとも亦盛なる
ハ、正五九月を何事ぞも忌て屠殺を禁ずるゝ、彼邦ハ
習俗より來まるゝ、

狐狸の書畫

予ゝて狐狸ゝきゝとゝる書畫をこれをまゝ〳〵ゝ大
ゝ狐ハ書狸ゝ畫ゝるゝもゝ〳〵さて老狐幸菴ゝ書をゝまゝ
る紀事ゝ藍田文集ゝ見え、既菴ゝ般若心經ハ既小墨帖ゝ
ありて予も藏幸せり、狸の畫ゝる寒山拾得の圖を萩生氏
の見ゝれゝとあり、白雲子とゝ狸の畫ゝる蘆鴈ゝ圖寫
山樓晁の藏ゝあり、これゝゝ書畫ハ縮寫して耽奇漫録中ゝ
載ゝられゝ、ゝゝ出さゞ、



一日佐玄龍與阿弟橘洞游於戸田光賢亭主人語
于客云濃州席田郡春近村者我采邑也有邑長井
上氏兄弟貞享丙寅年井上與三次郎家有奇事不
可牧擧也野干相馴友善或時欲行于他告別於井上
氏井上氏亦愛其情而賚物錢於孤穴前野干謝之
以書其書在光賢之家坐客相共見之筆勢文語不
異于人或引經文而云見此文則不可謂有孤疑者

乎、光賢欲録其事使佐玄龍筆焉予在坐應其責而
誌其後而已、于時元禄三年庚子之秋九月穀旦、
右ハ載する書翰ハ野干坊正元といふ老狐の手跡なり、
狐つねハ老僧の容ハありて、井上氏ハ物語ハ
も來りゝゆゑ書翰も多くあるゝどいつとなくなく
ゝこの一通のゝ遺れりと、來由ハ紀事ハ記者あられ
ど橘洞の文かゞゝ、原德齋のかゝれ友といふ筆記中ハ
たゝをうて摹寫ゝ、まさ下野國宇都宮ある
東盧山成高寺といふハ、狐のあやまり證文ありいつれ頃
ハうあんこの寺ハ覺道といふ僧ハ狐のそうつきゝゝうば、其

寺の住持とふ丹誠をこゝゝて祈禱ゝれ是ハ、彼狐一通の
證文をうきて罪を謝ゝ退きゝとや、そのあやまり證文
を今猶寺ハ傳ゝうとぞ、

鯨帯

今ハ裏表ゆたる帯を鯨帯といふ、元ハ黒天鵞絨ハ
白繻子などを合せたる帯明和安永のころ專ハ用ひたる
そのゝふ總ゝ白地ハ黒色をとり合するゆゑ鯨帯の名を起
ゝあるひハ兩面帯又ハ晝夜帯ともいふとゝや、明
和頃の俳書名物鑑ハ兩面帯といふ題ハて、夜晝の帯もこれ
つ閏九月風船ハ句あり、猶ゝハ天和の印本題林一

句ハ鹽吹やあせのうらされ鯨帯と云句あり又延享廿年
仙の附合ハ、ひろ〻川帯さへ今ハ世てうらこゞもこゝ
ゆゝしき名目と世ゝ云、

三養雜記巻一

5